

第21回全国生涯学習フェスティバル「まなびピア埼玉2009」参加事業 食育シンポジウム（概要） ～ 五感で学ぶ農林漁業体験「教育ファーム」～

1 日時：平成21年11月2日（月）13：30～16：00

2 場所：さいたま新都心合同庁舎2号館（さいたま市中央区新都心2-1）

3 内容：

講演

（1）学校農園から教育ファームへ

埼玉地産地消体験クラブ（下蕨教育ファーム協議会） 根本 浩 氏

- ・蕨市は人口7万人弱で面積が小さく農地が少ないところである。農業体験を行う農地を確保するために、市民農園を利用したり、小さな空き地を見つけたり、学校の中に農地を作ったりする必要がある。
- ・2003年2月から、蕨市立中央東小学校のおやじの会のメンバー43名の中から数人が交代で、同校の学校農園である「やっちゃん村」の管理を開始。
- ・おやじの会のメンバーはサラリーマンが多いため、草取りなどの管理は土日に限定されることから、農地の管理はおやじの会だけでは困難な面がある。
- ・また、学校が日頃の農地等の管理を行うことは先生が多忙なこともあり、どうしても地域のボランティアの方の協力が必要となる。そこで、学校農園「やっちゃん村」の管理は、おやじの会と地域のボランティアである市民農園の契約者の方数人と一緒に管理することとなった。
- ・補助事業では、ボランティアだけの活動、公民館とボランティアとが一緒に行う活動の2種類で実施し、その結果がどうなるかを1年間を通して検討した。
その結果、ボランティアだけの活動では、あいさつなどの生活面の教育的な指導ができない、ほ場に来ない人があり連絡が付けられない場合がある、ボランティアの方だけでは、農業体験の計画をつくれぬなどの課題があった。
- ・ボランティアだけでは農業体験全体のプランニングができないので、行政にコーディネーターとして参加してもらう必要がある。蕨市では、平成21年度は公民館が中心となって行っており、運営方針をつくり予算づけも出来ているので、農業体験を推進する体制は確立できていると考えている。
- ・教育ファームの事業として21年度は「地産地消体験クラブ」を立ち上げ、取組内容のグレードアップを図った。取組内容としては、HPでの体験活動の紹介とともに、現地に赴く体制を取り、県外、県内の両パターンの体験ができるようにした。
栃木県の農家では水稻や根菜類、埼玉県行田市の農家では大豆の栽培や豆腐づくりの体験活動を行った。なお、栃木県の農家さんは、とちぎマーケティング協会、行田市の農家さんは、埼玉県振興公社から紹介していただいた。
- ・農業体験を行う場所への移動はバスを利用する必要があるため、参加人数は50人程度に限定している。
- ・埼玉県行田市の農家は、来年以降も自分一人で継続して実施することには不安はあるものの、生産する喜びを子どもたちとともにわかちあいたいとの思いが芽生え始めている。
- ・農業体験では、農家と子どもたちの間にたって教育的な部分を担うコーディネータのような方が必要であると思っているものの、地産地消体験クラブでは、農家の思いを直接伝えることとしており、子どもたちが農家から直接に指導を受けている。おやじの会は農業体験の準

備を担うなど裏方としてサポートしている。

なお、農業体験を実施するには、学校と農家だけではできず、子どもの安全を確保等するために必ずなんらかの形でコーディネーターが必要であると考えている。

- ・農家自身がコーディネーターになることによって、農業体験が他の農家に波及し、ひいては地域を巻き込んで広がっていくと考えているので、農家のコーディネーターを育成していくことが必要ではないかと考えている。
- ・参加した母親から寄せられた手紙には、「子どもがキュウリを味噌につけてパクパク美味しそうに食べている姿に驚いた。」との感想があった。この手紙を書いた母親のように農業体験に参加することにより意識が変わり、その結果として地産地消や自給率向上につながっていくと考えている。

< 質疑応答 >

Q：埼玉県蕨市と栃木県では遠すぎて移動や金銭的な口スが多すぎると思うがどうなのか。どうして栃木県なのか教えていただきたい。

A：栃木県は前任地である。バスの借り上げ代は栃木南部でもほぼ同じ金額だと思う。私の考えではあるが、地産地消は必ずしも県内だけではなく関東一円の範囲を考えている。

Q：栃木県の農家のキャッシュフローはどうなっているのか。持ち出しになっているのではないのか。そのことが継続していくにあたっての重要なことと考えている。

A：今年度は補助事業で支払っているが来年度はない。

栃木県の農家は栃木マーケティング協会と協力して幼稚園に広告を入れている。料金は親子で5,000円/回で100人を受け入れている。栃木県では、農家にキャッシュフローが生まれるようにしている。

(2) 白石農園「大泉 風のがっこう」、NPO法人「畑の教室」の活動

大泉風のがっこう主宰、NPO法人「畑の教室」代表 白石 好孝 氏

- ・東京には8,000ヘクタール(東京ドーム1,500個分)の農地が残っているが、生産量で言うと東京の人口の約2%程度を支える程度の野菜しか出荷していない。
- ・東京で農業を行っている理由を良く聞かれるが、江戸中期には農地が多くあり、東京は立派な農村であった。それがわずか50年で都市化され減少していった。
- ・農業のメインストーリーは市場出荷であり、そこで高い技術を評価されることにあってきたが、都市部での農地が減少するとともに、保冷技術が進歩して地方で生産されたものが多く市場に流入してくるようになると、農家も生き残ることが困難となり、その考え方を変えていく必要がでてきた。
- ・我々は消費者とどのような関係を構築していくべきかということを考え、ハウスによる周年栽培を行って地域のスーパーと契約を結んだり、伝統的な練馬大根を生産を行ったり、消費者が参加できるブルーベリー観光摘み取り園の開設や、庭先での一年を通じた自動販売機による販売、練馬にある3箇所のJA直売所での販売など、地場流通による販売形態に切り替えている。
- ・我々は4つの地元小中学校の学校給食にダイコン、ブロッコリーなどを納入しているが、ボランティアで行っているのではなく、地場流通のお客さんとしてJA直売所に納入するのと同様に、農家経営の一部であると考えている。
- ・今後の都市農業の姿としては、昔の酒屋が行っていた醤油や酒などのご用聞きのようなきめ細かい農業を行うことではないかと考えている。
- ・ある一定以上の農地を持っている農家では、直販だけでは経営しきれないところがあり、市場流通を残している。

- ・20年ほど前であるが友人と、地域や消費者と繋がりをもってやっていく今後の都市農業の姿について議論したところ、都市住民の中には畑を耕したい人がたくさんおり、あるいは、耕したい人が増えていくのではないかと、市民農園は流行っているがうまく行っていないようなので、そうであるならば、農業のカルチャースクールいわゆるアグリ・カルチャースクールを実施すれば、地域都市住民が参加してもらえるのではないかと考えた。
- ・一方、一般の市民農園ではほぼ無料で行われており、農業を放棄した者が行政に農地を貸し、行政がそれを住民に貸すシステムとなっている。そうなると、農地は貸し放しになり、行政や住民も作物の栽培がわからない状態のまま、とりあえずやってみるということになってしまう。
- ・自分の農地を開放して区画を割り、農業技術のノウハウを提供して授業料をいただくことによって経営を成り立たせていく。畑の中へ都市住民の方に入ってきてもらい、栽培を一緒にいながら農業技術のノウハウを提供し、それを共有して楽しんでもらえる農業経営として農業体験農園を思いついた。
- ・平成8年から練馬区と農業者が連携して毎年1件ずつ開設し、現在14件の農業体験農園が開設されている。1,500家族を超える方が参加されており、農業者の指導を受けながら体験している。
- ・小さい子どもを連れた家族から老若男女までが、アグリ・カルチャースクールに参加しており、広い意味での教育ファームと考えている。(定期的に講座を開催している。)
- ・大泉風のがっこうでは、1シーズンに栽培する野菜を決めて、1区画30m²にトマト、キュウリなど15~16種類の野菜の栽培を行う。
- ・栽培は減農薬、減化学肥料を基準とした指導を行っている。はじめに配布資料等で肥料等の説明を行った後、実際に見本区画で作業見本を見てもらい、講習が終了してから各自が畑で作業を行うこととしている。
- ・例えば、枝豆の種まきの講習会では、枝豆に水を与えると腐るので水を与えないことや、ヤマバトの被害が大きいので気をつけることなどを指導している。
- ・収穫祭や交流会を実施することで、体験農園に参加している方の横の繋がりができ地域のコミュニティの役割も担っている。
- ・一般的な市民農園では60~70歳代の方が主体となっており、時間的に余裕のある野菜栽培の好きな人が実施している。
- ・一方、体験農園の利用者は50歳代が一番多く、上場企業の方や大学教授など様々な職業の方が参加している。これくらいの年齢になると、定年退職に備えて地域デビューして豊かな暮らしを行うことが目的となっている。50歳代に聞いてみると、人気があるのは陶芸、そば打ち、市民農園となっており、だんだん自然回帰して生活の基盤である食や土に戻っていくようである。
- ・体験農園の年齢層は市民農園とは違い、体験農園では50歳代27%、40歳代23%、30歳代14%とまんべんなく幅広い年代から参加者がおり、これらの人々は新鮮で安全な野菜を自分の口に入れたいという思いで参加していると考えられる。そういう方々の受け皿として、農業者が体験農園を開設し農業の教育的な情報を提供しながら、参加者の食を豊にする関係が生まれてくると思っている。
- ・体験農園は練馬に14件、都内に69件、埼玉2件、千葉2件、京都、大阪、博多にそれぞれあり全国的に広がってきている。
- ・都市農業は都市化の厳しい荒波の中で生き残る方策として、都市の消費者と共に生きていくことを見出してきた。具体的には、農業が持っている豊かな情報を提供し、それを受ける消費者も豊かな暮らしを作っていくことができる。これがとても大きな力となっていくと思う。
- ・体験農園は農家には経営であり、10a当たり100万円を超える売り上げが見込め、米で

- あれば十数倍、キャベツ、ダイコンを100円で販売すると3倍の所得に繋がる。
- ・従って、農家にとっては、体験農園は農家の経営と農業の情報を文化的に両立させていく活動となっている。
 - ・NPO法人畑の教室は、地域の一員として、子どもたちに役立つことができないかということで、平成15年から活動を開始した。主な活動としては、小中学校の授業での農業体験活動と学校を離れた親子での農業体験活動である。
 - ・農業体験活動は経営の一部として行っており、活動のコストは受益者負担としている。学校の授業では、教材費として保護者から会費400円/人を徴収している。この金額はダイコン2本分の価格であるが、それに加え農業に関する様々な情報提供も伴っている。
 - ・農業体験活動の実施前には、練馬区の校長会に出席して、どのようなシステムで行うかを説明して予め了承を得ている。
 - ・農業体験活動では、農業のプロ（農業の技術者）として学校に関わるが、教育的な部分については、教育のプロとして先生に関わってもらうことにしている。
 - ・体験を実施するにあたっては、全ての先生が農業に興味をもっているわけではないので、農業者の方から先生に対して情報やコンテンツを提供して興味をもってもらおうよう努力も必要である。

(3) 五感で学ぶ農林漁業体験「教育ファーム」

NPO法人オリザネット 事務局長 古谷 愛子 氏

- ・地域の自然環境について観察会を以前から実施していた。地域の自然環境と思っていたところが、例えば、川に魚が泳いでいて鳥が集まっているところが農業用水路であったり、カエルやカブトエビが生息しているところが田んぼであったり、鳥が群れている緑の森があると思っていたところが、人が管理している雑木林や農家の屋敷林であったりした。カエルなどの生き物がいなくなるということに直面してみると、農地が無くなっていたり、農家が廃業し農家の屋敷林が無くなってしまったりと、地域の自然環境が地域の農業と密接に関係しており、農地がなくなると地域の自然環境も無くなることに気がついた。
- ・一方、子どもたちからのイメージとして、農業は自然には良くないと思っていた。しかし、地域の環境をよく観察すると、アマガエルやトンボが育っているのが田んぼであり、農業は自然なのかというギャップがあった。環境系のNPOとしては、このギャップを埋めないと活動している目的がわからなくなってしまうと考えた。
- ・我々は地域の自然環境であるらしい田んぼでどのようなことが行われているのかという疑問をもち、実際に米づくりに取り組んでみると、アマガエルが米作りや農家の水管理とともに生きていることを実感した。
- ・農業の元気がなくなると、地域の自然環境もダメになることを多くの人（非農家）に実感してもらいたい。それで、農業体験を通して、非農家の方に農業が地域の環境を育てていることに気づいて欲しいので「田んぼの学校」いわゆる教育ファームを行っている。この活動以外にも農家自身が生産の場の環境を向上させるためのアドバイス等を行っている。
- ・教育ファームは通常の農業体験とは違い、教育的な効果も期待されているので、それを実感してもらうために、我々はその手法を考えている。田んぼの学校は20回近くの体験メニューを用意している。その目的としては、非農家の人々が店に買い物に行き商品を選ぶ際に、新鮮・価格・味・安全・産地の他に、田んぼの学校の一連の農業体験を通じて、国産のものや地域で作られたものを選ぶことが、地域の農業を支え、ひいては地域の自然環境を育てているんだということ、自身の価値判断の一つとして追加してもらいたい。
- ・古代米は収穫が遅く1週間前に稲刈りが終わったところである。参加した子どもたちに感じたことを聞いてみると「稲刈りは腰が痛くなって大変だ。」、「コンバインは優秀だ」、「稲

- 刈りが楽しいことがわかった。」などの感想がでてくる。中でも、五感を使った農業体験をしている子どもたちがおもい、のこぎり鎌で稲を刈る時の「ザック」という音を楽しんだり、ワラのにおいがいい香りだと感じながら作業をしている。
- ・50人くらい参加者がいても、「ワラの香りがいい」と自分から気づく人はほとんどいない。参加者に体験をさせるだけで気づいてくれるだろうと思ってもダメで、意識しないと普段使っていない感覚は働かない。こんな時は、スタッフが「ワラの香りはいいね」という言葉かけを時々行い、参加者に「あそうだね」と思わせることが重要である。
 - ・活動を始める時は米の生育状況を見ることにしている。稲刈りの時は「大きくなったね」、「米の粒が実ったね」と声かけを行い、その後「米粒を1つ取って殻をむいてみよう」という話をする。米粒はもみ殻が2つ重なっている。それを親子で殻をむいてみると、もみ殻が二枚に重なっているのがわかる。
 - ・古代米を3種類作っている。米の外側と米の色は全然違う。例えば、緑米だと外側の色が「黒」、米の色が「緑」で、黒米だと外側が「茶」、米が「黒」になっていて、そういうところにも驚きがある。
 - ・今度は剥いたお米をかじってもらって、子どもたちに割った米を見てもらう。黒米だと割ったお米は中が白色で、外側の黒い部分は「ぬか」であることがわかる。
 - ・稲刈り体験した後、「はざかけ(天日干し)」を行っている。子どもたちには「はざかけ」する際に、米粒をかじってもらい、どのように感じるかを聞いている。子どもたちの反応として「やわらかい」、「かたい」と2とおりの反応がでてくる。「やわらかい」と感じた子どもは、炊飯前の米のかたさをイメージしてそう感じ、「かたい」と感じた子どもは、稲の花の観察会の際、稲の中身を剥いたグニグニの乳白色の乳液状態であったことをイメージしてそう感じていると思われる。
 - ・実際には、「はざかけ」が終了した状態と比較するとやわらかい。今度は、子どもたちに、「はざかけ」した後の米のかたさを体験してもらって、「はざかけ」の前後で水分がきちんと抜けて脱穀できる状態になっているかも実感させている。このように体験活動の前後で変化を実感できるような仕組み(声かけなど)づくりが重要である。
 - ・農業体験は、家での日常生活だったり、学校の理科(植物の育て方など)、社会科(米づくり方法など)、家庭科(調理体験など)の活動と密接にリンクしており、このような学校や家庭での断片的な知識や経験が、五感を使った一連の農業体験により統合されていく。
 - ・新しい活動であっても、参加者が既存の知識をどんどん使って取り組めばより厚みのある活動になることが体験活動のすばらしいところである。それに体験活動を通じた実体験で得た様々な知識を統合できれば物事を考え行動できるようになっていく。しかしながら、体験を行っている際に、意識づけや声かけなどを行わないと実際にはなかなかその効果を感じられない。漫然と農業体験をしていてもダメである。
 - ・教育ファームは単なる農業体験とは違い、どのようなところに教育的効果をおくかをはっきりさせて、参加者に何を気づいて欲しいのか意識して行うことが大切である。
 - ・我々の目的は「農業が育てている地域の自然環境への理解」であり「地域自然を育てている農業の大切さへの理解」である。目的達成のためには、どうしても取り組まないといけぬ取り組みがあり、それは生き物調査である。
 - ・生き物調査を行うにあたっては、生物の成育が時期によって異なっており、春は「アマガエル」が産卵をしに来ているねとか、草取りの時期には田んぼの中で「オタマジャクシやヤゴ」が育てているねとか、夏場は足がはえたカエルがぴょんぴょんと跳んでいるねとか、そのようなことを声かけするなどして、まさに米と一緒に生き物が育てられていることを意識してもらうことが重要である。
 - ・大きな目的として、地域の活性化につなげる教育ファームであれば、都市住民が中山間地域

に楽しい農業体験に行き、中山間地域の農家が都市住民を受け入れることによって地域が活性化する。それには美しい自然環境を満喫できるような場所で、例えば、地域全体を使った里山歩きなどを取り入れてみるなど、地域を活性化するには地域全体を使った取り組みが必要である。

- ・健全な食生活を最終目的としているのであれば調理体験などが大切になってくるし、野菜の好き嫌いをなくし、バランスのいい食生活にすることを目的にしているのであれば、畑でもぎたつたの本当に美味しい野菜を食べてみる。その感動的は次につながる感動体験だと思う。
- ・環境機能や生物といったテーマを取り上げて、「地域の自然環境を守っているのが地域の農業」であると言った時に、どのような理由で生き物を守らなければならないのかということを知ってもらうためには、その前提として「地域の環境を守らなければならない」という感性が必要となってくる。それがないと「環境が大切だ」とは思わない。そのためには、地域の自然に育まれている生き物を好きになってもらわないといけない。例えば、子どもや親に、「カエルの声がおもしろいなあ」とか「カエルがかわいいなあ」と感じてもらわないといけない。それは感性の問題になるので難しいところがある。
- ・子どもたちが、生き物を嫌いによく言うが、それは当てにならないことが多い。子どもたちがイナゴや虫を触らないのは嫌いなのではなくて、刺されそうで怖いとか、急に動いてビックリしそうで怖いとか、カラダが脆くて壊れそうで怖いとか、自分でイメージできない部分が多くて、そのことが嫌いという言葉につながっていると思う。
- ・生き物が嫌いという子どもには、逆に生き物に興味のある子どもが多い。子どもは発達段階の途上にあるので、子どもの興味を損なわずに、またビックリさせないで生き物に触れさせていく体験が重要になってくる。
- ・例えば、カエルの嫌いと言う子どもに触ってごらんと言わないで、カエルはよく見ると目がかわいいねとか、カエルには吸盤があるよとか、声かけして一緒に見てあげることが子どもの感性には大事である。
- ・手応えの感じ方であるが、教育ファームの場合は、体験をやった効果がどうなったのかを意識することが重要である。例えば、得てもらいたい知識とか、感じてもらいたい感情とか、移してもらいたい行動とかが体験活動を通して身についたかをどうかをきっちりと評価していくことが活動の継続には必要である。
- ・体験活動の評価としてアンケートを実施している。ただ、感想を書かせるのではなく、伝えたい知識などが伝わっているかどうか。例えば、知識面の項目だと、赤トンボやアマガエルが田んぼで育っているのを知っているかどうかとか。意識や態度の項目では、生き物が好きになったかどうかとか、生き物のことをもっと知りたいかどうかなど、また、地域の農産物を食べてみたくなったとか、同じ値段で地域で穫れたものと外国産のものがあればどちらを選びますかとか、安全性が同じで高い国産品と安い外国産のものはどちらを選びますかなど、このような項目の評価は教育ファームではどうしても必要になってくると思う。
- ・参加者には感想文も書いてもらうが、各個人によって考え方や得ているものもまちまちである。主催者側としては、参加者が主催者の意図していないものに感動・感心していたり、意図しない行動に結びつけていたりすることがあり、次の参加者にも同じように感じてもらえればいいなあと思うことがある。この感情は、次の活動の糧になる部分として重要である。
- ・アンケートで評価できない部分については、体験活動中にスタッフが子どもたちの観察調査を実施する。子どもたちが生き物の扱いがうまくなったとか、ふれあえるようになったとか、母親の会話で自分の子どもがどう変わったかとかを聞いている。
- ・教育ファームでの効果があったと思える事例のアンケート（聞き取りも含めて）を紹介すると、「田んぼの学校にくるようになって、クラス一番の虫博士と唯一会話ができる女の子として有名になりうれしかった。」、「オオバコ相撲を教えたら、その場にはいない子ども

たちにも教えられるようになった。」、「自分のこどもが自然のものに興味を持つようになった。」、「生き物の大切さや農業の大切さについて自由研究をしたら賞をもらった。」などがあった。

- ・副次的な効果の事例としては、「ごはん、野菜を食べられない子どもが、田んぼの学校の収穫祭で作った呉汁を食べて、次の日からごはんをきっちりたべられるようになった。」、「学校の先生が田んぼの学校に個人的に参加して、自分が授業を受け持っている児童に出会った。児童は学校での印象とは違って生き生きとしており、その児童に対する価値観が変わった。学校での児童の一面だけを見ては子どもの理解につながらないことに気が付いた」、「国産の鎌（中国産の価格の3～4倍）と中国産の鎌の違いを体験させてみると作業効率が全然違うことに気づいた」というものがあった。
- ・教育ファームは目的を達する手段としてはたいへん有効である。しかしながら、目的を持たずに実施してしまうと、参加者側の「どんな楽しい活動できるのだろうか」という期待に振り回されてしまい、自分たちが何のために実施しているのかわからなくなって、疲れ果て継続できなくなってしまう。
- ・地域に広げるためには役割分担がたいへん重要となってくる。例えば、埼玉県では学校ファームを推進しているが、なかなか地域の協力が得られないと聞いている。地域の人々も協力したくないのではなく自分たちがどのような位置づけになっているのかわからないからだと思う。学校側も地域の人に話をしてもらうこと自体が目的になっているところもある。また、地域の人にすれば活動でどういうところに気をつけ、どういう内容の話をすれば、子どもたちに受け入れてもらえるのかイメージがわからないところもある。最終的な「めあて」が明確であり関係者の間で共有できれば、各々の役割がわかり目的に向かって一緒に進んでいけると思う。
- ・気を付けなければならないのは、なんとなく農業体験をすること自体が目的になってしまうと、得るものは少なく、協力関係も得られず、よくわからないものになってしまうことである。
- ・どんな目的でも構わないが、最終的にどんな力をつけてもらいたいのかの目的・目標を決め、それに向かって、どのような取り組みを行い、どのような活動を入れていけばいいのか、また、どのような人と連携していけばいいのかを考えていけばうまく行くと思う。

< 質疑応答 >

Q 田んぼの学校2009予定表では、活動が20回程度予定されているが、参加人数、募集方法、参加されている方の構成を教えてください。

A オリザネットは今年9年目で来年10年目になる。最初の3年間は参加人数も少なかったが、最近では70～80人の参加者となっている。ただ、活動が20回と多いので、それぞれの活動では約半数の人が出入りしている。

継続している参加者が70%で、新しい参加者は30%程度である。募集方法は新聞広告で行っている。広告には環境教育や農業の多面的機能を理解するために行っていることを記載し募集している。新しい参加者は、既存の参加者からの口コミが多く、幼児や低学年の子ども連れの親子が多くなっている。

個人参加者が20～30%で、親子が70～80%を占めている。なお、個人参加者はスタッフ的な位置付けとなっている。

会場との意見交換

Q：埼玉県では1学校1農園ということで、みどりの学校ファームを進めているところであるが、現状はなかなか進んでいないようである。何か解決策として、学校・行政側にアドバイスが

あればご教示お願いしたい。

A：現場で1人1人つないでいくのはやる気になれば可能であるが、施策的に面的に広げていくのは大変である。特に、行政には数字を追いかけてしまう傾向があり、例えば、学校給食に地域の食材を30%取り入れる目標があるが、たとえ目標を達成してもただ食卓に並んでいるだけでは効果は生まない。1%であっても、学校でいきいきと役立てられればその方がいいのかもしれない。柔軟にとらえて、それぞれの工夫をどういうふうに展開していくかを評価して地域の実情、農家の実情、先生の実情などがそれぞれ違うので、地域の具体的事例の中から、かなり難しいが選択できるようにできればいいと思う。今まで地道に取り組まれていたものが、制度化されると障害となってくることがあり、ゆるやかに進めていくことが重要である。

農林水産省が教育ファームを推進する上で注意することがあり、それは農業者側には下心があり、農業を理解して欲しいとか、国産品を買って欲しいとかが一次的な目標になって活動に入ってくる。しかしながら、学校の先生はそうは思っていない。先生の目標としては日本の農業の発展でも自給率の向上でもなく、今現在、目の前にいる子どもたちにどのように役立てられるかである。両者の目的が別々になってしまう。そうなるとお互いに協力関係が結びにくくなる。農林水産部門がやる教育ファームの基本は、地域の子供達にどのように役立てるのかということをお互いとして、地域の一員としてきっちり考えることが重要である。例えば、学校でも農業体験を実施すればウェビングマップなどの手法をとると、子どもたちの中から自然発生的に農林漁業部門が求めている答えが出てくる。そのような価値感が大事。地域のスタンスに立ってやっていくことが、逆に気がついてみたら農家の目標の近道になっていることがあり、互いに子どもたちのために進めていく上で大事なことであると思っている。

A：学校と農家が話し合いの場を持ち、時間をかけて十分に話し合いを行っていくことが大切であり、我々の取り組みにおいても、ボランティアや農家の方と1年間をかけて話し合った結果、蕨市の21年度の取り組みになっている

A：田植えの事例の出来事であるが、学校側から農家のところへ行って田植えをしたいと申し出があり、農家のところで田植え体験を行うケースで、農家の方が事前に植え方の指導をしても、苗の列が曲がったり、2~3本植えるところを10本植えたりすることがある。子どもたちは自分たちが植えたところがこの列であるということをお互い認識して帰る。しかし、農家の方では、稲刈りの時に子どもたちがで出来の悪い「ガタガタ」の田んぼを見てがっかりすると思って、子どもたちの帰った後に、代かきをやり直し苗を植え直してくれる。そうすると、子どもたちが稲刈りに訪れた時に、自分の植えた様子と異なっており違和感を覚える。学校の先生としては、教育として「言われたとおりにしなかったから、自分のところがうまく育たなかったということをお互い、子どもたちが結果的に理解してくれたら」OKということになるのだが、そのへんの目的意識や体験の結果がどっちの方向に向かっているのかという方針がないので、この事例のような行き違いが多くある。そのため、お互いに何を目標しているのかをお互い共有しましょうと言っている。

学校で総合的学習の一環として、田植え体験と稲刈り体験を子どもたちの共通体験として位置付けることが大切であると思う。稲作を共通のテーマにすれば子どもたちが興味を持つような生き物、稲の育ち方、植物、わら細工、米料理など、稲や田んぼにまつわる様々なテーマがたくさんありテーマ学習を展開するには格好の教材である。テーマ学習は教室でも家でもできるし、日常の食との関わりも多くあり活用できる部分である。特に、高学年の総合的な学習に田んぼ体験を位置付けることで、学校は豊かなテーマ学習や体験学習もできるし、何をしたらいいのかという方向性もしっかりしているので取り組みやすいと思う。外部に協力を得ようとした場合、子どもたちが何を目的にした学習のために行っているかということ

をきちんと理解してもらえれば、教育ファームの取り組みはうまくいくと思う。

- A 現場でどうしてもしなければならぬことは食事であり、それを確保することは大変である。栃木県で農業を行う際には、栃木県地域婦人連絡協議会にお声をかけさせていただき、地元の野菜を使用した一人500円程度の弁当をご提供いただいている。参加者には、地域にお母さんがいることがわかっていただけだと思う。

農家に食事提供が難しいのであれば、栃木県地域婦人連絡協議会のような役割の方も必要となってくると思う。

- Q 企画・コーディネートされているのでスタッフがいると思う。スタッフの人件費は参加料や事業量をどのように算出して計算されているのか教えて欲しい。

というのは、ある直売所から地産地消を推進するにあたり、農業体験を通じて地域の農業の理解を深める活動をしたいたいの相談があった。直売所のスタッフが現場に出向き農業体験を支援すると、直売所の1回あたり4~5人のスタッフが向うこととなる。このような場合、人件費を参加料に乗せると参加したい参加料とはならない。行政として当初は支援していくことは可能だが、継続して支援していくとなると、税金を多く投入することになるので避けたい。どのように工夫されているのか教えてほしい。

- A 蕨の場合は、ボランティアへの支払いは、市が支払っていると思う。おそらく、グループ単位の支払いで1年間で2万円程度であると思う。一人あたり時給いくらというやり方はしていないと思う。公民館のお手伝いレベルの計算となっていると思う。

- A 農業体験農園は農業経営として行っており人件費はない。入園料は、区画の賃貸料としてではなく、野菜収穫代金程度(1年で穫れるであろう野菜の代金)を徴収している。参加している皆さんには野菜を買う代金を負担していただいている。

しかし、野菜を買ってもらう代金では、JAや役所の職員の人件費にはとても対応できないNPO法人であれば、子ども夢基金や農文協の助成金を申請するか、例えば我々のNPO法人「畑の教室」であれば毎年80万円の活動費の中で謝金を払っている。

JAの直売所であれば、JAの経営陣が地域JAには社会的な役割があることを自覚して行っていくべきで、職員派遣などのある一定の負担は、JAの社会的な役割としての大事な仕事であると思う。今後のJAの在り方を考えれば、社会的な役割が考えられるが、JAのみではすべてが賄えないけれども、JAの職員がいたり、ボランティアの人がいたり多様な人材が支援を行っていくことが大事ではないかと思う。

- A NPO法人の理念として、農村の生物多様性を向上させるという目的があり、オリザネットのスタッフはその理念に賛同している人々である。

賛同の示し方には、お金に余裕のある人は資金を提供するし、体力に自身のある人は体力を提供するし、工夫ができる人は知恵を提供するなど様々である。

教育ファームの取り組みは、オリザネットの理念を達成する上で効果が高い活動であるため、来年以降も補助金の有無に関わらず実施していく予定である。

今年度の活動費では補助金と自己資金の割合は半々となっている。参加費は1家族あたり7000円を徴収している。

- Q 地元や都内の幼小中学生に対し、11年間ボランティアで農業体験を実施している。私は農業体験を始める前に「楽しくやろう。遊びではない。」という風に言うとともに、ほ場は生活の場であり遊園地ではないと強調している。難しいのは、中学生は田の草取りを1時間もすると泥の投げ合いとなる。私は子どもたちを叱らないといけないと思っている。子どもたちの叱り方を教えて欲しい。

- A 怒鳴りつけようと思っていた子どもたちはいたが、その子どもたちから感謝の手紙をもらったり、親から感動的な手紙を受け取ったりしたので最終的に許した。

私は昔からお父さんになったつもりで、悪い子どもの頭を殴ってきた。その時は、子どもの

親は静観しているが、後から「ほら怒られたでしょ。」とフォローしてくれた。

親たちは農業体験による子どもたちの変化を見ていれば、厳しく怒っても何も言わないと思う。怒る時には、ツボを押さえて愛情をもって長くは怒らないようにしている。子どもたちの変化はすぐには現れないが、数ヶ月たつと徐々にいい子になろうという心の変化がみられたと思う。

- A 子どもたちは基本的に、小学生でも中学生でもそうであるが、教室の外へ出ると気持ちがオープンになり「ハイ」になる。一番大事なのは、そういう状況に陥るので、事前に先生ときちんと話をしておき、「先生しっかりお願いします」という約束することが大事である。子どもたちは先生の話は肝心なところはよく聞く。それと、時間の設定であるが、子どもたちは30分程度しかもたないのので、一つの行程が30分以内で打ち切れるようなメニューにしている。畑や田んぼに来ると、農家に丸投げの先生が多い。このようになると收拾がつかなくなる。先生によっては、子どもたちの整列までさせられる。それでは困るので、先生には「子どもたちが話をきく体制まできちんと整えて下さい。さらに、子どもたちがザワザワしてきたら学校の先生としてとクラスをまとめて下さい。」とお願いし、明確に役割分担を行うことが必要である。

中学校の職場体験では、いつも4～5人を10校ほど受け入れている。この場合は、農家と体験する子どもたちの関係なので本気で怒らないといけない。本気で怒らないと、なめてかかってくる。体験の初日の午前中に何かあったら、本気で怒ると3日間きちんと言うことを聞いてくれる。親でもそうであるように、勘所をグューと押さえて叱っておくことが大事である。それから、テクニックを身につけることが大事である。子どもたちはしゃがむと泥遊びをしたり、土を触って絵を描いたりしてしまうので、子どもたちを立ったままにした。そして自分が一段上に登って説明すると、子どもたちは上を向いて少しは集中して聞いてくれるようになる。

農家も漠然と子どもたちを受け入れるのではなく、農家サイドなりのやり方があると思う。例えば、体験時間を考えたり、教科書を読んだりするなど工夫していく必要がある。教科書には子どもたちが単元で学ぶポイントがあり、そこを先生と話しておくことで、先生は単元のポイントへ導くために協力的になってくれる。先生が目キラキラしてこないとダメである。丸投げで先生が目がドローンとしていると、クラスがまとまらない。先生に何度も頼っていると先生が目キラキラしてきて、子どもたちも言うことを良く聞くようになってくる。農家も受け入れている限りは、色々勉強していく必要があると思っている。

- A 田植えのイメージとして、先生も子どもたちも泥だらけで楽しいというイメージも持っている人が多い。だから、真剣にやる部分と遊んでもいい部分を教えている。最初にそのことを言わないといけない。そうしないと、子どもたちは田植えをしながら泥でピチャピチャと遊んでしまい、きちんと苗が植えられなくなり、結果として、自分たちの成果が得られないことになってしまう。きちんとするということがどういうことなのかを真剣に伝えている。

叱ることはほとんどないが、道具の使い方を間違っていたり、鎌などを放置したりするなど、事前に徹底的に周知しているにもかかわらず、危険なことを行った場合は、かなり厳しく叱る。

生き物の取り扱い方で、鎌を使った作業中にカエルを鎌で押さえたり、カエルをPETボトルの中(かなり熱くなっている)へ入れた場合など、これらのことが生き物にどのような影響を与えるのかを理解していない場合には、その現場を見つけたら、これこれの理由ではいけないと一つ一つ伝えるようにしている。

- Q 教育ファームについて一つ提案をしたい。限定された地域で米作り・畑をやっており、また、次世代のために体験学習を色々やっている。例えば、教育ファームを前提として、埼玉県というエリアを考えると、学校が多く、いかに生徒を幅広く足きりせずに教育できるのか頭が痛い問題がでてくる。案であるが、埼玉県農業大学は先生も設備もすばらしく宿泊施設もあ

る。このようなところで、林間学校的な考えで、寝泊まりしてもらい、しかも1泊2日して貰うと、かなりの人数が体験できると思う。どこのエリアでどのくらいの人を対象に本気でやるかということに対してはどのように考えているのか。

- A 狭いエリアで、手の届く範囲で具体的なよい活動を起こしていくことが先決だと思っている。知恵は現場にあると思っている。現場の知恵を広い面で捉えると弊害や障害など、やりにくいことが起こってくる。それを繋ぐのは行政の仕事である。我々は現場におり活動も展開しているので、それを拾い集めて施策にするのが行政の仕事である。現場と行政がきちんと連携していくことが大切であると思う。おうおうにして、現場は行政が動かないと言うし、行政は一生懸命考えても現場が理解してくれないと言うし、お互いに双方が勝手な事を言い合っているのが現実である。私は、互いに知恵を出し合って何かを形にできるのではないかと考えている。体験農園の中でこのことを学んできた。練馬区の職員が我々のアイデアを面白いと受け止めてくれて、一緒に勉強会をやることになった。担当者が変わっても勉強会は4年間続いた。その中で、現場の知恵を出し、制度の問題を考え、行政の体制を整え、議会の調整も行った。そして、体験農園ができ全国に広がろうとしている。

地域においては、利害関係を超えた少し高め地域共通の目標を掲げて目指していくことが大切であると考えている。私が活動で大事にしているのは、広い視野で考えながら、地域で活動を起こしていくことである。私はこれを信じてやっていくしかないと考えている。知恵は現場にあると思っている。

- A 農村の生物多様性の向上を目的に活動を行っているが、田んぼの面積(1反)を広げることには考えていない。どのようにしたら効果が上がるかということについて方法やノウハウを皆で考えている。また、全国で教育ファームを行っている団体に、生物多様性の向上への理解という部分を取り入れてもらうために、生物調査のやり方やノウハウを蓄積したり、それらを普及していくにはどうしたらいいのかを試行錯誤している。私たちは、生物調査のノウハウを他の場所でも活かしてもらいたいと思っているので、自分たちで大きな面積を行おうとは思っていない。

- A 蕨の場合は農業体験にはレベルがあると思っている。箱庭程度から始めてフィールドでやれるようになった。今後は、農業体験のレベルを可能な限り、少しずつ上へ上へ向かって上げていきたい。

エリアの話であるが、例えば蕨では、見沼あたりに行動拠点をおけば、距離的にも近く、補助金がなくなっても現実的に対応できるのではないかと思う。

また、エリアについては、県の政策の中で考えていくことも必要であり、埼玉県内のどのブロック(エリア)で実施するのかを決めて実施した方がいいと思う。





第 21 回全国生涯学習フェスティバル「まなびピア埼玉 2009」参加事業
食育シンポジウム ～五感で学ぶ農林漁業体験「教育ファーム」～（11月2日）の様子